

堀文子 追悼版画展

（軽井沢の自然を愛した画家）



版画《名もなき草達》2015年

2019年8月1日(木)～30日(金)

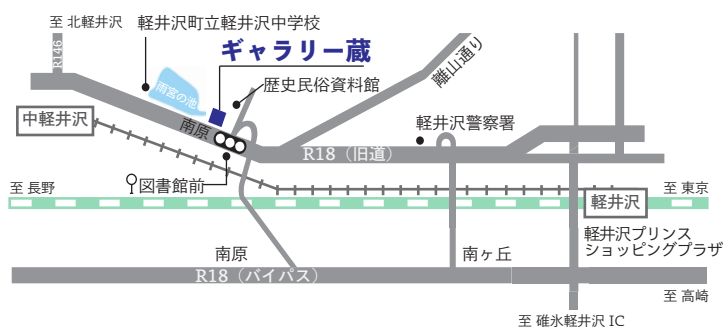
ギャラリー蔵

軽井沢町大字長倉 2112-21 (離山公園内・旧雨宮邸)

開館時間：10:00～17:00 (会期中無休) 入場無料

主催：株式会社ナカジマアート、一般財団法人堀文子記念館

後援：軽井沢町、軽井沢町教育委員会



8/14 イベント開催決定

サクソ奏者 坂田明のトーク & 追悼演奏 聞き手：青木裕子 (軽井沢町立図書館館長・元 NHK アナウンサー)

日時：8月14日(水) 14:00～ 会場：ギャラリー蔵 入場無料 事前申込不要 (先着順)

息の絶えるまで感動していたい。堀文子



© 飯島幸永

今年2月5日、堀文子氏は100歳でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

1918年東京麹町に生まれた堀文子は、幼少の頃から自然界の営みに興味を持ち、科学者を夢みるが、当時の女性に学者の道は厳しく、芸術の道で自立しようと、女子美術専門学校（現女子美術大学）師範科日本画部入学。在学中に新美術人協会第2回展に出品、初入選を果たす。戦後、創造美術、新制作協会日本画部、創画会に属し、新しい日本画を目指す革新的なグループで活動の続け、34歳のときに第2回上村松園賞を受賞。

「ものを創る者は都会に住んではいけない」との思いから、43歳で東京から神奈川県大磯町に居を移し、さらには軽井沢やイタリア・アレツォ市にアトリエを構え、豊かな自然と向き合い、取材と制作に没頭した。

常に新境地を生み出し、「私には一貫した画風はない」という言葉通り、作品は多岐に及び、「自然・歴史」への畏敬と命あるものに注がれる温かい眼差しは変わることがなかった。

軽井沢の自然を愛した堀文子 自然を求めて大磯に転居した堀文子が、さらなる自然と感動を求めて軽井沢にアトリエを構えたのは、1979年61歳。きっかけは、この地で出会った朱の鮮やかなふしぐろせんこの群生。驚きと不安を道づれに「山中独居」の暮らしを続けた。厳しい冬の軽井沢で生活を送り、霧氷や自然の中で共に生活した狐、冬枯れの高原の植物、冬山に魅了され、代表作「霧氷」(1982年)、「離山凍る」(1986年)など多くの作品を発表した。

今展は、堀文子の版画作品を中心に、写真家・飯島幸永氏が堀文子の軽井沢での生活を撮影した写真も合わせて展示する。軽井沢の自然を愛し、魅了された堀文子の作品の数々を是非ご覧下さい。



版画《花吹雪》2012年



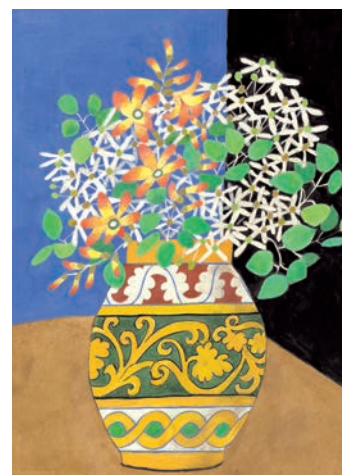
版画《嚙粟》2009年



版画《あかくらげの家族》2008年



版画《紅梅》2016年



版画《仙人草と檜扇あやめ》
2010年

※飯島幸永（いいじま・こうえい）写真家。堀文子の姿を十年にわたって軽井沢や大磯のアトリエから野山へ同行し、自然のなかで心象と重ねて撮影を続けた。2010年「堀文子 美の旅人 画家のまなざしと心を追って 飯島幸永写真集」(実業之日本社)出版。